

■ 熊本地震から5年—記憶の継承のこれから

熊本大学熊本創生推進機構 田中尚人

1. はじめに

熊本地震から5年が経ちました。新型コロナウイルス感染症が世界的に猛威を振るっている最中の令和2年7月には、熊本県南の球磨川流域を中心に豪雨災害が発生し、今だに不自由な暮らしを余儀なくされている方々も、多くおられます。熊本地震の際には、全国からかけつけて下さったボランティアの方々も、コロナ禍の対処については前例もなく、多くの試行錯誤が今も続いています。

私たちは、災害から何を学び、何を未来に伝えていけばいいのでしょうか。災害だけではなく、私たちは日常の、ごく当たり前と思っていることから、もっと多くのことが学べるのではないのでしょうか。

令和3年5月末からの二週間、(株)熊本日日新聞社、サントリーホールディングス(株)が共催して、熊本地震の記憶を未来に伝える「水の国くまもと未来予想図プログラム」が実施されました。

主催：(株)熊本日日新聞社、サントリーホールディングス(株) 後援：熊本県、御船町、嘉島町、益城町、南阿蘇村、熊本大学 熊本創生推進機構
総合監修：田中尚人

2. プログラムの概要

(1) プログラムの目的

「水の国くまもと未来予想図プログラム」では、「水の国くまもと」のまちづくり、アート、農業、教育等の視点から、熊本地震及びその復興過程における人々の記憶や経験を継承し、未来に伝えるため、熊本の大学生・大学院生たちが大学の枠を超えグル

ープワークを行い、自ら実践的な活動を提案するワークショップ(以下、WSと略)を行いました。

(2) プログラムのミッション

このプログラムでは、上記の目的に対して、以下の3つの活動方針を定めました。

- ①熊本地震からの5年を振り返り、災害やその復興の記録をアーカイブする。
- ②多様な主体と協働し、誰もが「記憶の継承」に取り組める熊本らしい社会を共創する。
- ③熊本地震やその復興の過程で得た記憶や経験、教訓を、持続可能なかたちで未来に引き継ぐ。

(3) プログラムのスケジュール

当初対面形式でのWSを予定していましたが、COVID-19の蔓延状況を鑑み、オンライン開催を主としたプログラムに変更しました。

5月29日(土) オンライン開講式

5月30日(日) 課題共有WS(対面)

6月4日(金) オンライン中間発表会

6月13日(土) オンライン最終発表会(学生たちは対面)その後、随時3自治体(御船町、嘉島町、益城町)への提案報告会を実施

3. オンライン開講式

5月29日、熊本の3大学(熊本大学、熊本県立大学、崇城大学)の大学生・大学院生10名が、自己紹介を行った後、京都大学防災研究所教授の矢守克也先生の講話、俳優で演出家の松岡優子氏、お茶乃のぐち野口大樹氏からの話題提供をして頂きました。

矢守先生は、自身の熊本地震の体験を含めて以下のようなメッセージを送っていただきました。

- ・「災害」ではなく、「日常」を伝える
- ・「あれから」ではなく、「それまで」を伝える
- ・「正解」ではなく、「成解」を伝える

松岡氏の講演「かたる, とは」では, 共感力を育むには, 「よく聞く, よく見る, よく感じる」ことの重要性を指摘されました。お茶農家の後継者野口氏の講演では, 災害からの復興において「100年後のまちづくり, 事業継承」を見据えた学ぶ姿勢を伝えて頂きました。

ワールドカフェ形式の「復興とは何か」を話し合うWSをオンラインで実施しました。事前にオンラインネットワークを構築 (slack を利用) し, 情報共有していた学生たちでしたが, やはり当日は, やや緊張した面持ちでした。しかしオンタイムで, 多様な講師陣からの一緒に学ぶ場に参加し, zoom のブレイクアウトセッションでのWS終了後は, 図-1 のような笑顔で, 学びを共有していました。

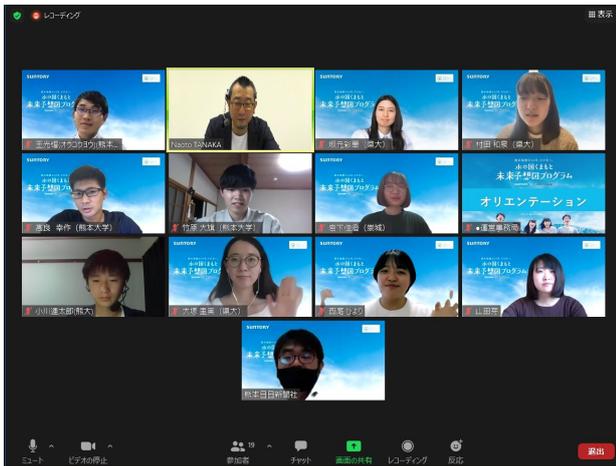


図-1 オンライン開講式の風景

4. オンライン最終発表会

6月13日, 学生達が3班に分かれ, 熊本地震から5年経ち, 風化や格差が問題となっている記憶の継承について, 持続可能なカタチで未来へと繋ぐ実践的な提案を3町に対して行うWSの最後のプレゼンテーション (図-2 参照) を実施しました。

A班: 益城町, B班: 嘉島町, C班: 御船町に対して記憶の継承に関する提案をしました。矢守先生の講評では, story (物語) を storying (語り) という主体的な活動に, そして Re: storying (語り直し) へと広げていくアドバイスを頂きました。松岡優子さんからは, 提案の肌感覚「温度」についてアドバイスを頂きました。

以下, 学生たちの振り返りを提示します。

- 毎日の日本語のコミュニケーションもたいへんだったけど, よく頑張れた。皆に感謝している。
- 忘れた記憶を, どうやったら伝えたい記憶になるのか, まだまだ考えたい。
- 学生にしか, 今しかできない体験ができた。
- 目には見えないアーカイブもあるのだと気づけた。
- 先輩達が様々な専門を持って活躍されているのが, すごいなと思った。
- これまで学んできた建築の技術を活かしてよかった。もっと現場に行きたかった。
- 今回は聞き役に徹した。最後まで誰一人欠けることなくプログラムが終えられて嬉しい。
- 二週間はいろんな意味で短い。ポジティブにわくわくできてよかった。
- 最後の最後に, 御船町の豊かな日常, ワクワクを伝えることができてよかった。
- 私はもともとはネガティブな思考をしていた。でも, 何度も現場に足を運び, 人々と会うことでポジティブに未来思考ができるようになった。

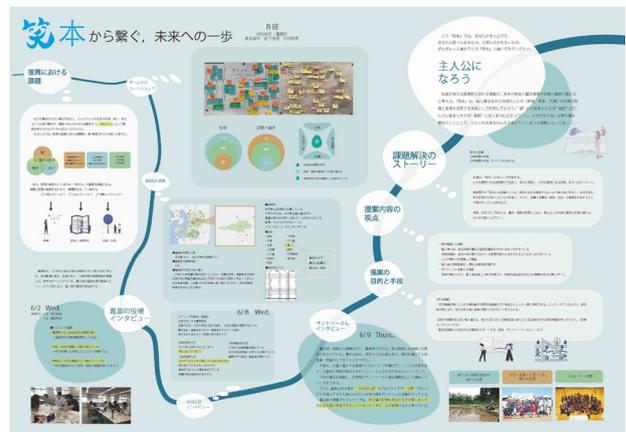


図-2 B班: 嘉島町への提案ポスター

5. 自治体への提案報告会

この二週間の取組みは, 終わりのない記憶の継承事業のリスタート, きっかけにしか過ぎません。しかし, 誰でも, どこでも, いつからでも取り組むことができる記憶の継承の実践の意味ある事例になったと考えています。今後, 御船町, 嘉島町, 益城町役場にて学生たちが提案を報告 (図-3 参照) し, その模様が新聞やテレビ等で紹介される予定です。



図-3 C班：御船町提案報告会（6月21日）の風景

参考文献

- 1) 熊本大学くまもと水循環・減災研究教育センター デジタルアーカイブ室 (https://cwmd.kumamoto-u.ac.jp/digital_archives_laboratory/)
- 2) ひのくに災害史録 (<https://cwmd.kumamoto-u.ac.jp/terada/>)

(2021年7月入稿)